



第13号
H28年3月1日発行

三教区門徒推進員研修会開催

新潟教区門徒推進員連絡協議会会長



長岡組 正楽寺
細山隆朋(釋義弘)
中央教修一四〇回

昨年十一月八日・九日、二日間の日程で長岡市蓬平温泉「和泉屋」で開催されました。国府教区から三名、長野教区から四名の参加で、教務所から野村所長と担当の木口さん、講師には雲林先生、合計三十名で開催されました。

テーマは「御同朋の社会を目指す運動(実践運動)の取組みから門徒推進員に求められるもの」で行われました。研修会は、新潟教区の元上組託念寺門徒の堀井善治さんの司会で初められ、教務所長の挨拶、続い

て細山会長の挨拶は今年十月一日より八十日間に渡って第二十五代専如門主伝灯奉告法要が開催され、それに伴う事項と法要の日程の中で全国門徒推進員の集いが開催されるとの報告がなされ、門徒推進員として万障お繰り合わせの上出席下さいとの挨拶がなされました。

その後、各教区の活動紹介では、新潟教区からは八子昇道さん、田邊諄子さんから発表され、長野教区からは金井達也さんから、長野教区では今日まで東日本大震災から四年間二十四回にわたって東北地方に赴き、復興支援活動を支援され、今後も長野教区ではより多くの被災地で関わりを深めるため継続的に支援活動を続けていくとの報告があり、感動した次第であります。

今回の研修では、御同朋の社会を目指す運動の取組みから門徒推進員に求められるものをテーマに、講師の雲林先生から六十分に渡って講義を受けました。各班ごとに話し合い法座に入り、各班ごとに活発な発言

がなされました。先生の講義は、宗門の基幹運動の具体的な活動、とりわけ基幹運動はその当初より門信徒会運動と同朋運動の二つの運動を一本化した形で進められてきた。その起りは昭和四十六年、宗門に同朋運動本部、門信徒会運動本部、研修本部の三本部が設置され、その後今日に至っている。

部落差別は私たち宗門全体の課題である。この取組みから過去帳問題や部落差別問題など学習会が生まれ、今日の連研につながっている。連研は昭和四十九年に始まり、昭和五十三年に地方教区でも連研が開催されるようになり現在に至っている。今後とも各教区全組で連研が開催されるよう努力することが望まれる。 合掌

終戦から七十年に思う



与板組 雲外寺
丸山正義(釋正義)
中央教修一八七回

二〇十五年は、戦後七十年の節目にあたります。自分なりに感慨深い一年となりました。国内の問題、海外の問題、どれを取っても深

刻化しており、解決の兆しも見えず、世界が冥途の道を歩み続けている。脱する事が出来るのか、不安が続きます。

国内では、北朝鮮による拉致問題、前年には期待を持ち、帰ってくるのではと思いましたが、いまだ未解決のまま心配すら遠退くようにも映ります。又、広島、長崎の原爆投下された日本としては脅威を感じる核実験が行われている現実があります。

日本政府においては、安保法制において、自衛隊が海外でも働けるようにと、憲法九条を逸脱しているかの様な法整備を行いました。日本の平和憲法を戦争の出来る国に変えようとしている。又、東日本大震災が有り、原発事故が有り、復旧復興が道半ばである様な状態に有る中、原発事故原因不明が解明されず再稼働が始まりました。オリンピック開催に向けて建設人不足を招き、東日本や豪雨に遇った地方の方々は、復興の遅れに疑念を持つておられると思います。

海外に目を向ければ、ISのテロ事件、それに伴い難民問題、中東各国の内戦戦争状態、近くにはスプラトリー(南沙諸島)、中国の埋め立て進出、地球全体が不安定要素が沢山あります。

私は戦中生まれ、二才五ヶ月で終戦を迎えました。昭和二十年八月長岡空襲を薄ら覚えがあるだけです。生地が越路の浦という所で、長岡より外れていたため、戦争の悲惨を実体験としては有りませんが、終戦後の惨めさを

覚えております。食料品の不足による配給制度は待ち遠しく思っていたようです。我家ではカレーライスに豚肉が入ったのは、年一、二回位と思います。主力は野菜のみ、又は魚肉の缶詰が入れば良かったと覚えています。

又、農家でしたので子どもの頃より家事の担当が沢山有りました。十一才位になると学校から帰れば田んぼに入っていました。それでも我家から戦争に徴兵としては行っておりませんでした。回りの家より良かった状態と思います。親戚の方が疎開して来られ共同生活の時期がありました。今から思えば苦しかった事より色々経験させて頂いたため、今があると思います。東日本大震災に遭われ避難されてきた方へ思い遣りも生まれましたし、九月十八日の千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要へ参加しなくてはとの思い、教区の社会実践運動部会「平和を誓う念仏者のつどい」(十二月十三日)等の研修会には、参加意欲が出てきます。

今、中東地域は戦争状態に有り、難民として避難しなければ命が脅かされてしまいます。受入体制の伴われない中、命からがらの避難です。戦争という名のもと人殺しがまかり通る。私は、殺されるのは嫌だ。殺すのも嫌だ。子どもや孫に戦争へ行ってもらいたくありません。念仏者の一人として、今何が出来るか、しなくてはいけないのか。原爆被爆国として核廃絶に向けて声を出してゆく事、又、安全の保障が出来ない原発再開問題、憲法九条に抵触する安保法制、戦争の出来ない国が、戦

の出来る国へと変容していく事の危惧、平和憲法の維持が大切と声に出していく勇氣。(九月十七日夜、安保法制反対のストに参加)兵戈無用、怨みを怨みで返せば留まることなしと教わりました。

東日本大震災のボランティアに参加したいと思いつながら、未だに大した事は出来ないでいます。頭の中では「話を聞く、よりそう」と解っているつもりでも不安です。今まで傾聴するという事は連研の話し合いしか経験がありません。対面した時、自分と言う我が強が出て、自分の思いや、方向性をもち誘導するのではないかと、「よりそう」にならないのではないかと疑問が先にきます。 合 掌

与板組門推協の活動について



与板組 隆泉寺
八子 昇(釋昇道)
中央教修一七六回

今年の活動計画として新しく取り組んだのが、与板組連続研修会の各期ごとの同期会の実施です。組内の門徒推進員の連携をはかると共に連研履修者との懇親会、研修会、そして、中央教修への勧誘を目的としました。

今までも『連研同窓会』と銘打って懇親会、研修会と実施して来ましたが、いつも顔ぶれは同じでマンネリ化していました。何か打開策はないか？と役員で知恵を絞りました。その為には一九〇名程の連研履修者が連研で学んだ初心に帰り、僧侶を囲んで各期ごとに懇親を深め、盛り上がる機運を作ることが大切であると思いました。各期ごとに幹事と担当僧侶を決めて履修者に案内して実施しました。結果、盛大な盛り上がりを見せた期と日時の都合がつかず？閑散とした期もありましたが全期の同期会を実施することができました。来る三月四日には割烹にて『葬儀社さんにく！お葬式Q&A』と題して研修会と懇親会を開催する予定です。盛大になる事を祈るばかりです。

会報『なかま』（年2回発行）も第10号となり、各寺院を通して門徒さんに配布しております。編集もようやく形が見えて来て、今はシリーズとして、現在、連研で学んでいる門徒さん数名からの寄稿、与板組住職から門徒推進員に望む事、与板別院発行の通夜のころ・葬儀のころ等を取り入れて刊行しております。

まだまだ、活動はありますが、今回はこの二つの活動を紹介させていただきます。



合掌

新潟別院冬囲い作業に参加して



長岡組 善行寺
土田興作（釋正意）
中央教修二二六回

十一月二十八日午前十時から新潟別院での冬囲いに作業に参加しました。当日の参加者は元上組八名、長岡組六名、三条組二名、巻組一名、与板組五名、新潟組二名の合計二十四名の外、教務所職員三名方々が参加され冬囲い作業に汗を流しました。

参加者の中には、木々を本職さながらに上手に縄を使って見栄えの良い姿に作業されていきました。私は縄の扱い不得手の為、もっぱら木材等の運搬作業に取り組みました。もう少し、やり方を身につけていけば皆様のお役に立つ事が出来たのにと思った次第です。本堂の脇の入り口に、特殊な組み立ての出屋を構築する作業には、かなりの重量物の為、組み立てに皆さん苦勞していました。昨年の組み立ての状態を職員に残してあったんですが、なかなか方向・位置が合わなくて時間がかかりました。十二時前には冬囲いも完了して、お昼の弁当を頂きました。

新潟別院は境内も広くて、皆さんの協力を得ないと大変なのが良く解りました。来

年も都合が着いたら参加させて頂きたいと思いましたが、今冬は平年に比べて暖冬の為、雪降しも不要なのかもしれません？何時ドカ雪の恐れもあります。準備に越した事はありません。参加された皆様、本当にお疲れ様でした。

合掌



庭木の雪吊り

組み立て作業に奮闘！



仏の国タイ



長岡組 善行寺
長藁勝身(釋賢徳)
中央教修二三四回

昨年の九月十四日、少し緊張気味で夕方七時三十分発タイのバンコク行きの飛行機に成田より向かいました。新潟は残暑があり収穫の秋真盛りです。時差が二時間あり現地到着予定は十一時半、夜中です。今回はツアーではなく友達が仕事の関係で六年前よりバンコクに滞在しており、定年も近いので辞める前には是非との事でお盆の帰省時、急に決まりました。パスポートに国外免許等々準備が大変でした。

しかし、バンコクのスワンナブーム空港に到着してからは環境が一変、成田から六時間夜中の気温が三十度以上、雨期でジメジメして残暑の日本から来たのに余りの違いに大変驚きました。施設内は冷房が二十度設定で寒い位で、それがご馳走です。

泊めていただいたマンションは一日中冷房が効いていて快適です。外出は三十度以上の外気と湿気、又、電車や店内では二十度以下で、温度変化には注意が必

要です。バンコク市内は非常に活気が満ち溢れ寝ない街で、観光後の帰宅が遅くなったある夜中二時過ぎの市内は、余りの人出で祭りが行われているようです。これが毎夜の現象であると聞きました。タイは政治が不安定で、今は国王制ですがいつまた軍制に変わるか不透明であるようです。

滞在中にいつも思いました。人々が非常に穏やかでゆったりしていることです。バンコクはじめチェンマイには寺院が多く僧侶の皆さんは裸足で托鉢をして歩いていました。人々はお金や食べ物物を差し出して、合掌しお願いをしているようでした。仏に向かう御心のあり方がこの穏やかな人々に繋がっているのだらうかと感じることは、京都での教修が役立ちました。楽しく過ごさせていただいた仏の国タイの旅でした。



「ほうおんのつどい」に参加して



元上組 善行寺
林惣一郎(釋慧真)
中央教修二二九回

二〇十五年六月十三日、長岡リリックホールにおいて、元上組主催による親鸞聖人七百五十回大遠忌「ほうおんのつどい」が開催された。今回は、元上組内の若手僧侶の皆さんが中心になって企画したもので、ユニークなプログラムとなった。

リリックシアターは満席となり、元上組組長の表白(法要の趣旨を本尊および参加者に告げ知らせること)の後、まず「絵ものがたり正信偈」で幕が開いた。これは正信偈をやさしい表現で物語にしたものを、元上組のメンバーが朗読した。次に、元上組の僧侶、門徒衆三十数名が舞台に並び正信偈のお勤めが始まり、会場の空気が法要らしくなった。

引き続き、ご影により布教されている「ともいえ」の皆さんによる、親鸞聖人の出家の場面が映し出され、幻想的な世界に魅了された。最後に僧侶、大学教授であり、多くの著書のある、釋徹宗師の法話となった。師の幅広い活動を通しての親鸞聖人のみ教えを、分かり易くお話しいただいた。

閉会の前に皆で恩徳讃を唱和しながら、このような集いに参加出来、ただ「よかった」で終わりにしていいのか、と思った。

釋徹宗師の本を何冊か読んだ。「宗教は人を救えるのか」の中で、大学での自分の講義を受けていた女子学生が、父の死で精神的におかしくなった例が出ていた。彼女はショックで、色を失い目の前の世界が白黒になった。事情を知った僧侶は法事の度に、熱心に法話をされ救ってやろうとされた。

しかし、その話は彼女の心まで届かなかつた。ただ、色が一瞬戻ることがあった。それは、家に僧侶が来て一緒にお経を読んだ時だった。人を救うために、どんなに言葉をつむいでも、ひと声のお念仏に及ばない。この文章から、お念仏の習慣が全ての始まり、と改めて認識した。

合掌



さわやか講話会



元上組 明鏡寺
内藤由美子(釋知深)
中央教修一八九回

「人間は氏育ちに貴賤があるのではなく、生き方に貴賤がある」ある書物の一節です。

二十七年七月五日午後二時から専徳寺に於いて第十五回元上組門推協主管の「さわやか講話会」が開催されました。一時間前から聴聞される方が次から次へと、二百部用意の資料も瞬く間に手渡され満堂となりました。

二時開式、厳かに合掌・礼拝・おつとめは「しんじんのうた」本堂一杯に響き渡りました。

御講話は本願寺派布教使 与板組 雲外寺 前住職 真敷祐弘先生『癌を生きる』、死という厳しい現実に向き合わざるを得なくなれば、それをどの様にお話されるのか固唾のみ待ちました。然し柔和なお姿で死と向き合う様子も見せられず淡々と話されました。

知らせる医師も聞く患者も癌の告知の難しき、昨年九月癌に罹っていると宣告を受け、手術・入院・加療の日暮しの中で「死」と向き合う。三リットルの血液が自分の体から出、三・五リットルの輸血、癌は他人事と思つたのに皆様のお陰で生かされました。二人に一



人は癌になると言われる昨今、だが癌という病気は考える時間を与えてくれる。最後の最後まで自分の生き方を考えさせて頂ける。癌は生存率五年。どう死んでいくか私の一大事。限りある「いのち」だからこそ有難かつたと言える生き方の中で、己が分を尽くして行き切ろう、命は長さではない、命の質を考える。彼の土へ参る者、尊い命、死んで参るものではない。いのちより大切なものを明らかにする仏法、無量寿のいのちとは「真実」と親鸞聖人は受け取られた。縁がなければお寺に来ない、六十才以上の方は沢山いられるがお参りが減っている現状、こうして足を運べる深いご縁があったのです。

死ぬ時は歩けぬ、一日五千歩歩きなさい。歩ける人で死んだ者はいない。深く心に染みる言葉を噛みしめ聞かせて頂きました。震災支援金も沢山の方から協力頂き有難うございました。最後に恩徳讃を感無量、感謝の心で歌わせて頂きました。

合 掌

門徒推進員になって十年 思う事



三条組 専正寺
白倉 節（釋清和）
中央教修一五三回

- 一、この度のご縁は、今生初めてのご縁
と思うべし
- 二、この度のご縁は、私一人のためのご縁
縁と思うべし
- 三、この度のご縁は、今生最後のご縁と
思うべし

京都本山で三泊四日の中央教修で学び、門徒推進員になって十年となりました。その折、「浄土真宗はいのち終わるまで心掛けて聞くことだ」と繰り返し話されました。教修が終わっての感激を「聞くことは今、まさに今だと気付かされました」と阿弥陀如来様の御前に決意表明した私でした。

菩提寺の専正寺様では毎月一度法話会が開かれます。月命日にお参りに来られる時、持参の「みのり通信」に今月の法話と予定が書かれています。私は「みのり通信」の言葉を読むのが好きです。私一人のために配って下さっていると有難く、楽しみに読ませてもらっています。

如来様の御本願はお念仏を申すこと、後生大事と私を見守り続けてくださり、浄土へ生まれさせて下さる働きを聞かせていただく法話会を心待ちにしています。

合 掌

お念仏を次世代に伝える



三条組 長念寺
久保田武志（釋淨徳）
中央教修一七九回

昨年十一月十五日に、第三十三回新潟教区仏教壮年会研修大会が三条組仏教壮年連盟主管で、「仏教壮年として、家族礼拝をすすめていこう」をスローガンに三年に一度の研修会、一年に一度の「聞法の集い」を開催してまいりました。

お念仏を次世代に伝える為には、まず家族からとの思いもあり、今まで取り組んでまいりました「家族礼拝を進めていこう」を大会テーマにし、子どもからご年配の方々まで対象とする家族参加型の研修会を計画しました。会場は小県山長念寺さまにて開催され、多くの方々と講師の石本龍憲氏の心温まる法話を聞き、アトラクションで若婦人合唱団の透き通るような歌声が心に響き、終盤には全員で「しんらんさま」を歌い心が一つになったように感じました。

その後大人の部と子どもの部にわかれて法話を聞き、子どもの部ではビンゴゲームなどして楽しい時間を過ごすことが出来ました。その中でもおつとめの時のことでした。最前列には幼稚園くらいでしょうか、可愛らしく正座をして、上手に経本を持つ姿を見て、何とも言えない暖かな気持ちになりました。いつもよりゆつくりとおつとめをさせて頂きました。

毎年六月九日に、長念寺仏教壮年会主催で「聞法の集い」を開催しています。二百人前後の子どもからご年配の方まで幅広い年代の多くの方々からお越し頂き、主催する側としては喜びを感じつつ、日々住職様や坊守様、門徒推進員の方々が地域の方々を思いやり、接していただけるからこそ多くの方が足を運んでいただけるのだと思います。このようなご縁をいただき、有難うございました。合掌

勝敬寺子ども餅つき大会



地蔵堂組 勝敬寺
永塚陽子(釋慧光)
中央教修一六一回

一月十一日、地蔵堂組 勝敬寺に於いて、子ども餅つき大会が催されました。参加者は、小学校六年までの子ども達三十二名、手伝いの中学生が数名、そこにお勝手やPTAの方々などで大変大勢になりました。「ヨイショー！ヨイショー！」と掛け声も勇ましく、一人づつ餅つきに挑戦しました。見ている方も思わず力が入りました。可愛い写真をご覧ください。

その後、お庫裡でつきたてのもちを皆で頂きました。あんこ、きな粉、おろし餅に雑煮もち。おかわりする子もいて、大好評でした。

最後のフィナーレは勝敬寺名物のじゃんけんゲームで大いに盛り上がりました。その日は、真冬の寒さとは対照的に、子ども達の笑い声で満ち溢れていました。「来年、中学生になっても、お手伝いにきたいなあ」と言う孫の言葉が、心に残りました。それは、ご住職と奥様が、子ども達のために毎年頑張つて下さったお陰だとここに感謝申し上げます。

これからも門徒推進員として主人と二人で「お寺のお手伝いをさせて頂きたい。お念仏の人生を歩ませて頂きたい。」との思いを新たにいたしました。合掌



連続研修会 再開



新潟組 信生寺
長場昭一(釋弘宣)
中央教修一三五回

平成二十一年より、「連研」を休止しておりましたが、平成二十七年より再開できましたこと嬉しく報告申し上げます。

目的は、組や教区の行事を企画・運営する上で連研修了者(研了会)や門徒推進員の参加協力が必要で欠かすことは出来ません。新規会員を養成し、組の活動に協力出来る人材を育成する事、そして本山の中央教修を受講し、門徒推進員になっていただくことだと思っております。

内容について、次の通り行いました。

【第十二期 連続研修会】

九月二日 円満寺(五泉市村松)

講師 川井善樹氏(新潟組組長)

題 私にとつて幸せは

十月七日 林徳寺(新潟市江南区江口)

講師 真谷誠祐氏(林徳寺住職)

題 葬儀や法事は何のために

するのですか

十一月十九日(二十日)

赤倉ホテル「有縁講」参拝旅行

講師 清水正朋氏(光源寺住職)



十二月四日 光林寺（新潟市中央区）

講師 伊南 亮氏（光林寺住職）
題 私は神様も仏様も信じています。何故？

毎回参加人数は約二十名位です。赤倉ホテルの有縁講では、与板組の佐々木さんや長岡組の中村さんと顔なじみの方とご一緒になり、嬉しくなりました。初日に「恵しの里」を参拝し、翌日国府別院を参拝、居多ヶ浜に立寄り、無事帰りました。連研委員の僧侶の方には大変お世話になり、本当に感謝申し上げます。
合掌



真宗門徒として

巻組 妙光寺

早川廣久（釋廣心）
中央教修一八二回



十月二十七日、研修会として親鸞聖人が関東へ行く途中立寄ったとされる長野善光寺と寺内にある堂照坊へ旅行に行つてきました。聖人の残されたとされる書物等を見ながらの貴重な研修会となりました。又、二月二十七日に開催の巻組キッズサンガ（おときコンクール）に際し、組内のお寺では各行事において精進料理を出しているお寺があるそうで、その料理を食べる機会がありそうでなさそうで？ということ、おときコンクールを開催しようとなり、それには善光寺門前町に精進料理を出してくれる所があるという事で今回の研修会を計画しました。

実際どういったものが精進料理として出てくるか楽しみがありました。さつまいもを原料に使った料理が多く、お粥があり、私たちが普段から贅沢に食している肉・魚はなく、精進料理として頭に浮かぶものとは違い、新鮮味がありました。そもそも私達は祖父・両親から食事をする時「作ってくれた人に感謝していただきなさい」と

言われてきました。また、門推員になりお寺様の法話を聞き、肉・魚・卵等それぞれの命をいただいて私達がいきっていると聞き、「あーなるほどな」と気付かされました。今、色々なツアー旅行や遊びに行つた場所での食事で気付くのが、周りの人の「いただきます。ごちそうさまでした。」という言葉が！私が言葉を発すると「ジロツ」とみる人が多く、自分が悪い事をしていてのと勘違いするほどです。子どもでも保育園・学校で言葉を発しているのに…。

言葉には仏教からの意味合いのある言葉が沢山あります。自分で思い込んでいたことと違ったということがチョクチョクあります。阿弥陀様の働きにより、生かされている私。布教使さんが言いました。「門徒推進員は資格ではなく自覚です」と。皆さんも中央教修での決意表明を思い出し、お寺へ聴聞に行き、阿弥陀様にお会いしましょう！
合掌



門徒推進員中央教修出向



巻組 長光寺
梨本重雄（釋重願）
中央教修一九七回

何人かの人達から勧めがあり、中央教修に門徒推進員スタッフとして参加する事が出来ました。皆さんに感謝です。

新潟教務所からの推薦で申込みをしていただき、間もなく二四二回教修の出向依頼の通知が届き、九月三日から七日まで、二回目の中央教修を体験させて頂きました。二〇〇九年七月の第一九七回から六年。教修内容は忘れていても多々ありますが、感動だけは忘れていません。「初心原点」を思い出すべく先回とは違った感動を味わう事が出来ました。

二日目に門徒推進員としての報告があり、六年間自身が家庭や地域で心がけてきた事を報告しました。まずは、形を真似するところからと、本願寺新報と大乘を購読している事。読みこみなせなくても関係本も購読（積ん読）してきた事。組や教区の催しものには、都合をつけて参加した事。正信偈などは意味は解らなくとも練習は時折してきた事。式章は家庭や地域などで、着用すべきところでは着用してきた事。仏壇を

大切にと言う事でご仏飯とお花は絶やすことなく供えるようにしてきた事。所属寺は近いけれども訪れる事が少ない事。など、自分自身について報告しました。発表後組内門推の活動をもっと発表出来ればと反省もし、同時に六年間進歩がなかったことも知りました。

それは、次の人の報告を聞いたことからでした。もう一人の門徒推進員スタッフは、北海道空知北組の方でした。この方の報告は後日本願寺新報に載り話題になりました。それは、組内の交流を深め門徒推進員の活動を活発にするための取組みで、組内の寺を廻りながらのスタンプラリー。皆さん集まっのジャム作りの報告でした。

受講者四十二名、僧侶スタッフ十五名、見学者三名（見学者といっても僧侶スタッフと同じ日程）。その内の一人は女性でしたが、門徒さんが僧侶になられた方だそうと言葉がでませんでした。受講された方々は今回もまた「決意表明式という一生に一度の感動の場に出会えた」「話合いの場では参加出来た事に喜びを得る事ができた」と述べられています。

この素晴らしい教修を連研参加者に伝え、そして組門徒推進員同志の繋がりを深めることの大切さを感じています。生きていくときの糧となる研修に出会えた事は有難い事です。組内門推の活動をもっともっと発表出来ればと思いい、そしてもっと聴聞に出

かけ「浄土真宗」の教えに気付く自分でありたいと、心の中で私も決意表明を行ってきました。

おときコンテストに参加して



巻組 万栄寺
大石清江（釋寂定）
中央教修二一六回

子ども達の「おいしい」という言葉と笑顔に出会えた事が何より嬉しかったです。この様な機会を頂いた事に感謝いたします。参加すると決めてからメンバーで話し合い、メニューを決め試食をしました。会うたびに具体的なイメージができ、メンバーの思いが重なり合って来ました。「おいしいね」「これ何だろう」「あれ！何か中に入ってる」等、驚く子ども達を思い描きながら試行錯誤しました。

当日「準備万端、さて本番」と勢い付いたのですが、アクシデントはあるものです。忘れ物があり、更にホットプレートが温まらず、急遽フライパンで作業をすることにになりました。各調理台からフライパンを総動員し、時間を気にしながらの作業で焦り



も頂点に達した頃、他のチームの人から「何かやることある？」と声を掛けて頂きました。『テラトモ』とは本当に有難いと思いましたが。

どのチームの料理も工夫の凝らされた美味しいものばかりでした。私達のチームは、「目と舌を喜ばす愛情たっぷり賞」を頂きました。メンバー全員、目と舌で楽しめ、遊び心のあるものを作りたいと目指してきたので大満足でした。楽しかったの一言です。料理の素材は無駄にせず使い切ることを食べてくれる人のことを思い作る料理。食を通して生かされていると実感させて頂いた一日でした。ありがとうございました。

合掌



|| 編集後記 ||

冬も過ぎ春がやって来ました。私は八十歳になりました。妻も健康で七十三歳。目出度く昨年十一月に金婚式を迎えました。子どもは四十六歳を頭に一番下は三十九歳。三男一女であります。

孫は、成人を頭に一番下は保育園児。二男六女であります。皆な市内におりますので、いざという時には皆な来てくれます。

今あるというのも、みんなご先祖様のお陰です。大事にしたいと思えます。ここまで生きたこの命。大切に、大切に生きていきたいと思えます。



善徳院 釋 法眼

